

話題提供 1

向社会性と動機づけ：関係論的・発達の視点からの提案

宮城教育大学 伊藤 順子

本稿では、動機づけと社会性のインタラクションについて、社会性、特に、向社会性の視点から考察していく。社会性とは、「独自に存在する個体が互いの働きかけに応答する関係性」であり、胎児期から成熟期にわたって成長するプロセスである (Damon, 1983 山本監訳 1990)。これには、個人の独自性が明確になる「個性化」のプロセスと、他者と共存し社会に適応する「社会化」のプロセスがある (Figure 1)。「自己」は、親、きょうだい、仲間、保育者、教師といったさまざまな人間関係を通して、彼らの人間関係を取り巻く社会や文化に適応するために必要な言語、知識、態度、価値観を学びながら、「個性化」・「社会化」のプロセスを経ていく。社会性には、さまざまな側面があるが、まずは、著者がおもに関わってきた向社会性と動機づけとの関連の理論的背景をまとめ、動機づけと社会性の橋渡しを論考する。

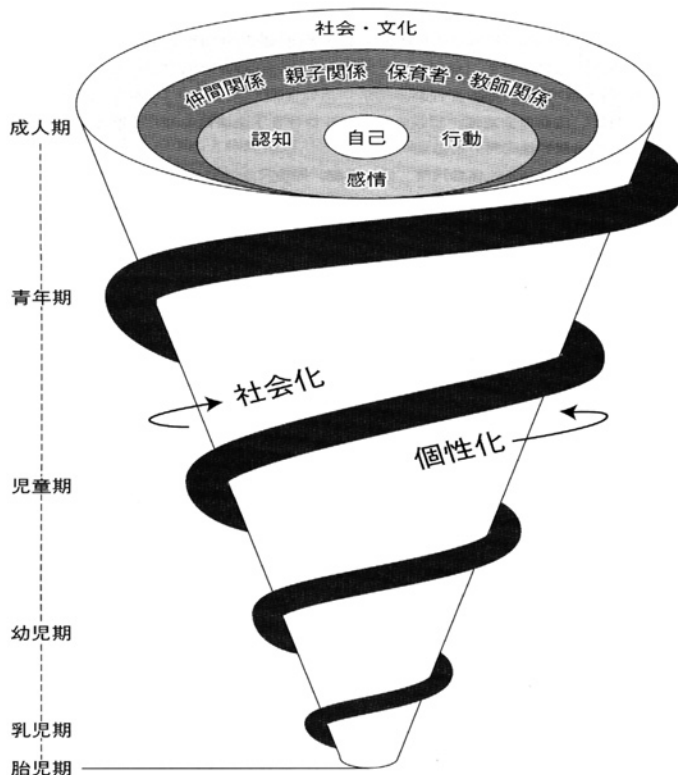


Figure 1 社会性の形成モデル (渡辺・伊藤・杉村, 2008)

子どもは、向社会的行動を身につける潜在的な能力を持っているが、その行動自体は学習されなければならない。では、子どもはどのようにして向社会的な方法で行動するようになるのか。こうした疑問に対して、向社会的行動の獲得・発達を支える過程やメカニズムについての検討が行われてきた。

1. 社会的学習理論

社会的学習理論では、加齢に伴う向社会的行動の変化は、社会的学習歴の差異に起因すると考えられてきた (Radke-Yarrow, Zahn-Waxler, & Chapman, 1983)。子どもは直接・代理的強化を通して向社会的に行動ができるようになる。学習された行動はその後も維持され、行動は一貫性をもつ。そのため、特に、幼少期においては、社会化のエージェントである両親の役割は、モデリングにおいて重要であるとされている。

2. 認知発達理論

認知発達理論では、発達とは子どもの「頭の中」の仕組みの変化であり、発達段階（認知的側面）からのアプローチが重要であると考えられている。「できる（例 役割取得）」ということは、子どもの中に何らかの構成（psychological construct）が存在し、「能力」とはそれを保有する人が「持っている力」である。そして、子どもは自ら主体的に社会とかかわり、刺激を解釈したり体系化したりする存在であるという見地から、行動よりも判断や判断に至る認知過程に焦点が当てられている。例えば、モデリングと帰属理論との関係から社会化の認知面を検討した研究では (Grusec, Kuczynski, Rushton, & Simutis, 1978)、帰属教示は、子どもの認知面（例 prosocial self-image, self-perception）、情動面の両面に影響を与え、向社会的行動を内在化することが示唆されている (Mills & Grusec, 1989)。さらに、Hoffman (1982) は、発達における情動的側面（共感性）の重要性を提唱し、他者の心を「自分ごと」として理解する「共感的心の理論」を構築している。これらの研究成果を受けて、向社会的意志を遂行まで導く内発的動機づけ過程が数多く検討されてきた。その中でも Eisenberg (1992 二宮他訳 1995) の意思決定モデルは、それまでの研究成果を取り入れつつ、今後の研究の指標となるために作られた代表的な理論モデルであり、現在の向社会的行動研究の基盤となっている。

しかしながら、Eisenbergのモデルは個人内の行動生起モデルであり、いかに過去の経験や行動が現在の行動を動機づけるかといった「個」の向社会的性の変容過程は明らかではない。子どもの行動は、過去から現在、現在から未来へと、「自己」を媒介として展開している。今後、子どもの向社会的性と動機づけの関連を明らかにするためには、「自己」と関連した要因を取り入れ、「個性化」・「社会化」の視点から検討することも必要ではないか。

3. 関係論的発達理論：「個」×「環境」発達モデルの可能性

そこで、ここでは、「自己」を媒介とした向社会的性の発達と動機づけという視点を手がかりに、「個×環境」発達モデル (Ladd, Brich, & Buhs, 1999)、関係論的発達理論 (佐伯, 2001) についての近年の研究知見を踏まえ、幼児期から児童期における向社会的性の発達と学校教育との関連、さらには、向社会的性と学習動機づけとの関連について議論したい。

近年の社会性についての研究では、仲間関係が固定し始める幼児期に社会的スキル介入を行うことで、小学校での不適応を予防できること (Mize & Ladd, 1990)、さらに、幼稚園での向社会的行動や反社会的行動は、仲間関係・教師との関係に関与し、これがクラスでの協調性・自主性、さらには就学へのレディネスに影響 (Ladd et al., 1999) することが示されている (Figure 2)。こうした結果は、「自己」に

関連した要因が、動機づけと社会性研究の橋渡しになる可能性を示唆している。

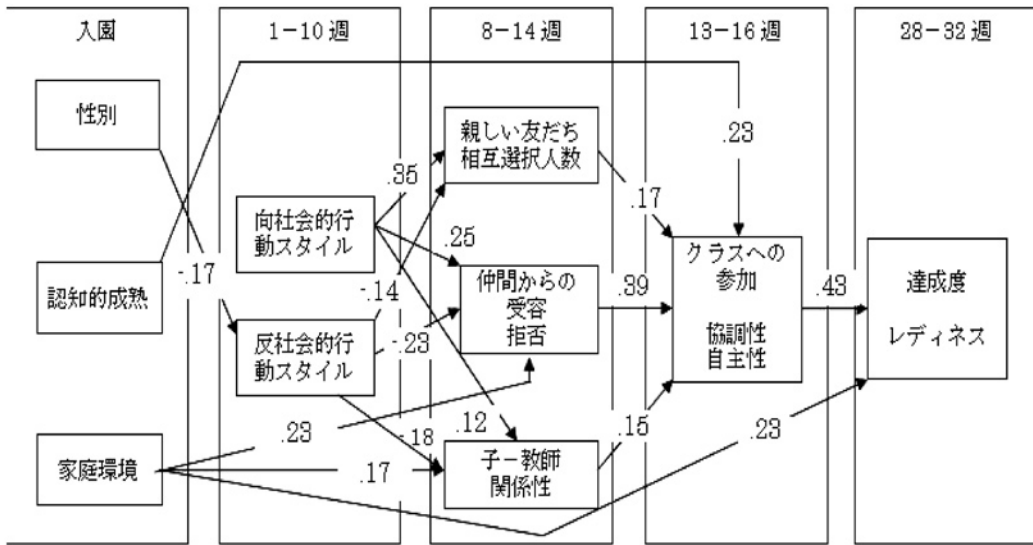


Figure 2 「個×環境」モデル (Ladd, Brich, & Buhs, 1999)

「個性化」と「社会化」に関して、児童を対象とした向社会性の横断研究では、向社会性に関する「自己（価値観・効力感）」は、量的・質的に変化し (Figure 3), 向社会的行動の出現 (Figure 4) に影響を与えていることが示されている (伊藤, 2004, 2007)。さらに、向社会的行動の出現は、価値観から影響を受ける段階から、価値観と効力感の両面から影響を受ける段階へと変化している (Figure 4)。こうした結果は、いかに「自己」が向社会性を認知しているか、向社会的場面における意志や判断の方向性が左右されるかということを示しており、向社会的行動の動機づけにおける「自己」の重要性が示唆される。

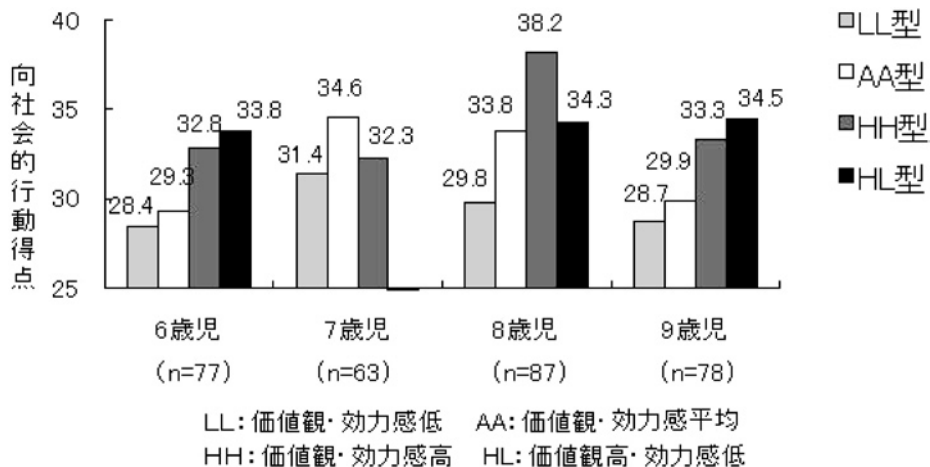
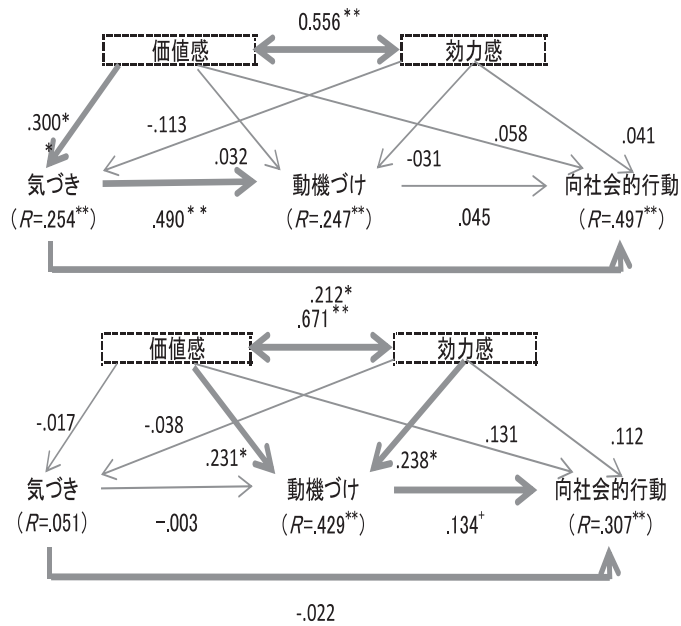


Figure 3 向社会性の変容 (伊藤, 2007)

動機づけと社会性のインタラクション



註 上段7歳児 下段9歳児

Figure 4 向社会性と向社会的行動との関連 (伊藤, 2004)

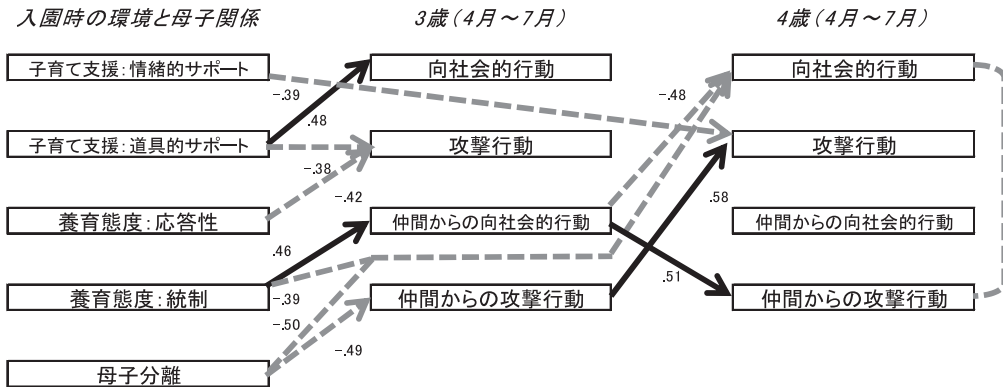


Figure 5 入園前の環境と仲間関係との縦断的検討関連 (伊藤, 2007)

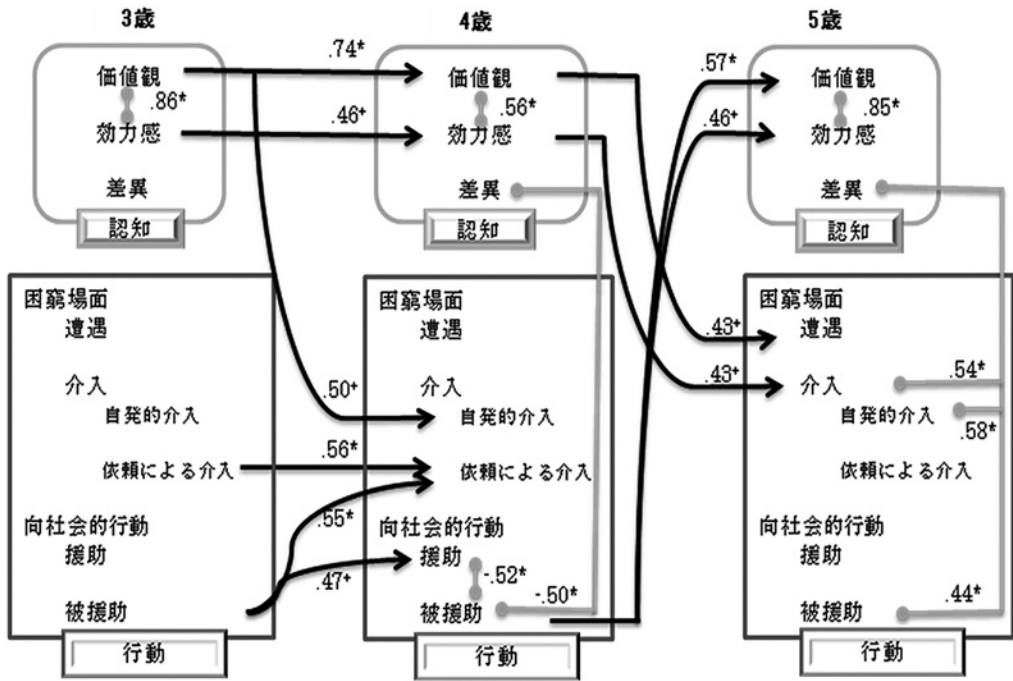


Figure 6 向社会性と向社会的行動との縦断的検討 (伊藤, 2004)

また、幼児期における幼児の向社会的行動と社会化に関して、3歳入園児を対象に、入園前から卒園年度までの4年間、家庭、教師、仲間という環境の中で、幼児が「自己」を主体として向社会的行動を学習するかを縦断的に検討した。その結果、家庭から幼稚園への環境移行期においては、母親の子育て支援についての認知が入園後の社会的行動と関連していることや、統制的な養育環境からは向社会的行動が育ちにくい傾向が示された (Figure 5)。また、幼児期における向社会性の発達には、向社会性についての認知 (価値観・効力感) が行動に影響を与える過程と、仲間からの援助経験が向社会性についての認知に影響を与える過程と、2つの過程があることが示された (Figure 6)。「自己」を媒介とした向社会性の発達の多様性が示唆される。

上記の研究 (伊藤, 2004, 2007) は、幼児期に焦点を当てているために、「個×環境」モデルが学校文化という文脈を背景とする児童期以降に適用できるかは明らかにされていない。また、幼児期という発達段階を考慮したため、学習や学びの達成度という視点は取り入れられていない。

「関係論的発達理論」では、「能力」とは、さまざまな状況の中で、さまざまな人やモノ、あるいは、目的などとの関係で、人が行う実践活動を通じて可視化される現象であると考えられている (佐伯, 2001)。発達とは、道徳性、自立性、協調性、等にかかわる「心情」を含んだ子どもの文化的実践である。どのような状況で、どのような関係の中で子どもの特定の「能力」が可視化されるのか、子どもの行為の原因 (動機) を、人、モノ、出来事の「関係の網目」から探ろうとするものである。こうした理論を踏まえると、社会化と動機づけの関連を検討する場合、客観的・量的な発達研究とともに、実証的・質的な関係論研究の重要性が示唆される。

子どもの社会的行動 (学習を含めて) は、過去から現在、現在から未来という連続性の中で変容する。

子どもの社会化と動機づけの関連を明らかにするには、「前発達段階の仲間との相互作用が、いかに次の発達段階の社会性に関与しているか」、あるいは「前発達段階の社会性がいかに次の発達段階の学びや学習に関与しているか」という連続性を踏まえて、関係論的・発達の分析も重要なのではないだろうか。遊びにおけるインフォーマル学習から教室場面の集団フォーマル学習への移行を探ることによって、向社会性の発達と学校教育との関連、さらには、向社会性と学習動機づけとの関連を明らかにすることで、学校教育段階における動機づけの発達解明への一助となるのではないかと考える。

引用文献

- Daman, W. (1983). *Social and personality development*. New York: W. W. Norton. (デーモン, W. 山本多喜司 (編訳) (1990). 社会性と人格の発達心理学 北大路書房)
- Eisenberg, N. (1992). *The caring child*. Cambridge, MA: Harvard University Press. (アイゼンバーグ, N. 二宮克美・首藤敏元・宗方比佐子 (共訳) (1995). 思いやりのある子どもたち—向社会的行動の発達心理— 北大路出版)
- Grusec, J. E., Kuczynski, L., Rushton, J. P., & Simutis, Z. M. (1978). Modeling direct instruction, and attributions: Effects on altruism. *Developmental Psychology*, 14, 51-57.
- Hoffman, M. L. (1982). Developmental of prosocial motivation: Empathy and guilt. In N. Eisenberg (Ed.), *The development of prosocial behavior*. New York: Academic Press, pp.218-313.
- 伊藤順子 (2004). 向社会性についての認知はいかに行動に影響を与えるか—価値観・効力感の観点から— 発達心理学研究, 15, 162-172.
- 伊藤順子 (2007). 幼児期から児童期における向社会性についての認知の機能—価値観・効力感の発達の検討— 平成16年度～平成18年度 科学研究費補助金 (基盤研究C) 研究成果報告書
- Ladd, G. W., Brich, S. H., & Buhs, E. (1999). Children's social and scholastic lives in kindergarten: Related spheres of inferences?. *Children Development*, 70, 1373-1400.
- Mills, R., & Grusec, J. (1989). Cognitive, affective, and, perioral consequences of praising altruism. *Mills-Palmer Quarterly*, 35, 299-326.
- Mize, J., & Ladd, G. W. (1990). A cognitive-social learning approach to social skill training with low-status preschool children. *Developmental Psychology*, 26, 388-397.
- Radke-Yarrow, M. R., Zahn-Waxler, C. Z., & Chapman, M. (1983). Children's prosocial dispositions. In P. Mussen (Ed.), *Handbook of child psychology, 4th ed., Vol.4: Socialization, personality, and development*. New York: Wiley, pp.469-545.
- 佐伯 胖 (2001). 幼児教育へのいざない—円熟した保育者になるために— 東京大学出版会
- 渡辺弥生・伊藤順子・杉村伸一郎 (2008). 原著で学ぶ社会性の発達 ナカニシヤ出版